



古巻和芳展 *Kazufusa KOMAKI*

絹の国の母たち

2013年7月10日(水)～7月28日(日) 月曜・火曜休廊 12時～19時(最終日17時まで)

古巻和芳は、特定の場所に存在する一サイトスペシフィックー作品を主に制作してきました。その土地やある場所で私たちが目にするものすべては、音や香り、匂いや肌触りを含め、様々な要素を含みながら身体の中に重なり合っていて、記憶として積み重ねられていきます。土地やそこに住む人々の記憶と向き合うことによって、「今生きている世界の意味」の問いかけを試みています。

今回の展示では、臙げでありながらも勁さと美しさを象徴する「絹」をテーマに、古くから日本の女性が持ち続けてきた神秘的な美しさと矜持を連想させる造形を立ち上げています。

「生」と「死」の容れものとしての「壺」。

絹の国の地母神・ヴィーナス像としての「トルソ」。

一人の女性の生きた時間をイメージさせる4mの「生糸の束」。

古い着物がかつて輝いていた瞬間を、「鏡」を通して垣間見る映像展示も併せ、「日本の女性」へのオマージュとしての作品世界を展開致します。是非ともご高覧いただきますようお願い申し上げます。

Artist's statement

私は、大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレの「繭の家ー養蚕プロジェクト」という作品制作のため、2005年以来、新潟県十日町市内の蓬平という集落に通い続けており、ここでかつて養蚕を営んでいたお年寄りから生糸や絹にまつわる様々な話を伺う機会に恵まれた。中でも印象に残ったのは、自分が育てた蚕の糸で自らの花嫁衣装を織ったという女性の話だった。慎ましい暮らしの中にあっても、自らの門出は美しく着飾りたい。齢七十過ぎの彼女から、いつの時代も変わらぬ女性の性(さが)と、またある種の気骨のようなものを感じ、どきりとしたことを今でもよく覚えている。

もともと私が養蚕をテーマとした作品を制作しようと考えたのは、実家が呉服屋だったからだ。毎年、夏に墓参している先祖の地も、丹後ちりめんの生産が盛んな集落だった。幼い頃から店先で日常的に目にしていた反物、そして母親の着物姿などからなる私の個人的な記憶は、足かけ8年となる蓬平通いで触れた日本の記憶の古層と結び合い、私の中で一本の糸としてつながったような気がしている。

今回の作品展では、越後妻有の「女衆(おんなしよ)」との出会いや、呉服屋を営んでいた母親の記憶などを手がかりに、絹や着物に思いを託した「日本の女性」たちへのオマージュとしての作品を展開しようと考えている。絹は、長い年月を経ても、美しい光沢を放っている。彼女たちが愛した着物や生糸という素材を様々なメタファーとして用い、彼女たちが女として生きてきた時間を、そして現代の日本から失われつつある絹の記憶を、それぞれ彫刻やインスタレーション、映像など、いくつかの作品群から表現したい。

古巻和芳